E－4　家具の所有構造――家具の買いかえと処分に関する考察――

大阪樟蔭女大　○一棟宏子　大阪市大　富樫穣

①はじめに：住宅規模の拡大は着々として進まない中で、所有する家具は著しく増加している。このような現状において家具が住生活に及ぼす影響は大きく、居住者が家具に対してどのように評価し、どのような行動をとろうとしているのか、その構造を明らかにすることは重要な課題であると思われる。ここでは「買いかえ」「処分」という行動のメカニズムを明らかにすることにより上述の課題に迫ろうとする。

②調査：千里ニュータウンからプラン型と住宅階層を組合せた13の住宅型をそれぞれ30ヶずつ抽出し、アンケート調査を行なった。調査時期は1970年、有効回答は385件であった。

③調査結果：「買いかえ」は電気製品が圧倒的に多く、全体の3/4程度を占める。その大部分が「故障した」ために買いかえたもので、入居年度が古くなるほど買いかえはふえる。しかし、その他の家具については入居年度よりも規模・収入にほぼ比例している。その理由は「古くみすぼらしくなり、他の家具とつり合がとれなくなった」が多く、電気製品とはっきり区別される。「処分」については、「買いかえ」に比べ、全体に件数は少ない。ダンス類、机、応接セットなど場所を大きくとるものについては「部屋を広く使いたいから」が多く、ベビーベッド、乳母車、入居時にもちこんだ下駄箱は「家で使わなくなった」が多い。また「処分したい家具」については、処分できない理由として「古いがどこもこわれていないから」が最も多く、次いで「使っていなくても処分するには何となく惜しい」となっている。

④まとめ：「使い捨て」が宣伝されている中で、「買いかえ」はかなり行われているにもかかわらず、業外「処分」はされていない。それは「仮住い」意識とかなり関わりをもっていると推測される。つまり、現在は狭くて少々不便だが、いつか広い場所に移った時には必要になるだろうという考え方である。「もったいない」という古くからの生活習慣が家具置場も考えられていないような、きわめて限られた空間においても捨てられていないことがわかる。